

Title	祭禮と世間, 柳田國男著
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.2, No.1 (1922. 11) ,p.148- 149
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19221100-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シア人の神マウイに比較したアマンチニーが天地をおし開いた開闢説話の如き、宮古島の人が犬の兒であるといふ傳への如き附近諸國の古來の傳承と比較すると興味津津たるを覺えるのである。著者がその繁劇なる實務にたづまはる間に琉球の研究に従事せられたり、あるは感謝すべきであり、なほ將來同地方の古代宗教法律政治の各方面に就て研究を公けにせられ琉球が學界に對して有する學問的使命を遂行せられんことを望んで止まざるものである。

江刺郡昔話

(佐々木喜善著)
郷土研究社發行

遠野の佐々木君が、淺倉利藏と云ふ炭焼きの人から聞いた民話を大體の骨子として編まれた江刺郡昔話集である。「或所に爺と婆とあつた。」といふ様な話を「昔話」として最初に載せ、その次に致富傳説、道祖神の由來、飛んだ神の話と云ふ様な小話を「口碑」として載せ、最後に狐に化された話と云ふ様なや、現實に近い種類の話を「民話」と云ふ綱目の本に載せてある。此三種類の綱目の分け方は一寸そぐはない感じがするがあつめられた説話は實に興味あるもののみである。殊に面白く讀まれたのは著者の「江刺を歩き」と云ふ感想文であつて、著者が五輪峠の雪を踏んで江刺郡に入り、蘇民曳を見たり、鴉神社に詣つた記事が鮮かな地方色を讀者の前に展開する。英國の學者が最近フォークロアの使命は民衆の生活を如實に描き出すのにおりといふので、さういふ新しい立場に立てば著者の様に説話の語り語られてゐる人々の生活に深い同情理解を有しその氣分をしつくり描き出すことの出来る様な人は實

に羨むべき地位にあると云はねばならぬ。集められた民話は、もとより一部の人々から見れば無益なものであるかも知れぬ。然しながら此山間の深谷に幾百年の閑生息した人々の賑みや懐びが此等の説話の中に滲透してゐる様な氣がする。東北に生れ東北に育つた著者の様な人が單に江刺郡のみならず東北全體の各郡の民間傳承を尋ね歩かれたならば極めて有益なる收穫がもたらされる事だらうと思ふ。さういふ企てがかつて計畫され、所謂學者階級の無理解によつて挫折したのは惜むべきことである。現代日本は皮相な西洋文物が急速に蔓延しつゝある時代である。やがて吾人がその根柢となるべきもの日本人の國民性はけして最高學府の博士達の作られた國民性十講などと云ふ様な本の中から發見されはしない。否純な形で農民の間に残つて居る説話詩歌等の中にかへつて燦然たる光を放つてゐるのである。此意味に於て數世紀の後に今日等閑視されてゐる民俗學者の著作物が日本人の尊い遺産と考へられる時代が來やう。吾人は待ち遠しいが次の時代を自指して勞作してゆかねばならぬのである。

祭禮と世間

(柳田國男著)
郷土研究社發行

有形的物質を研究する物理學と無形の精神的所産を研究する民俗學とがその研究範圍の纏張り争ひをしたのが本篤である。仙臺鹽竈神社の神輿が町内を暴れ廻り民家を破り警察署に亂入した事件を東北大學の日下部博士が、物理學的に解釋し、二つ以上の力

が同時に働けば、其合力の方向に動くから、個人個人の意志に反對する方向に進退し、理解力のない人に神意と誤信せられたのであると報告せられたのに對し、著者は、挑戦していふ。祭禮には古來平素仲間の慣習に違ふやうな者に神意として制裁を加ふる風習が附隨してゐた。神輿は由來神の乗つてゐる所と考へられて、その重くなり軽くなるのは悪い兆候ともなり吉い兆候ともなつたのである。如何なる場合に重いかといへば祭に仕へる氏子達が重くなつても不思議はないと思ふやうな時に重くもなり荒れもする

日下部博士が想像せられた如く神輿を昇ぐ多人数は決して各人區々の心持を以て運動するものでなく、日本には氏子の間に若衆制度の様なものがあり、此連中が神輿を擔いだのであり、神輿昇ぎの心理は儘に統一してをつた。而も力強い一つの動力、即ち至つて古く且頑固な習慣といふものに由つて統一されてゐたのである。

以上が著者の意見の大體である。民間信仰の様な精神的現象を物理的に取扱つてしまふことはその現象の伴隨條件を説明するかも知れないが、現象全體の眞因を闡明なし得ざる所である。此點に就ては著者が「突然の改革と外部からの強制」とに對しては、理由なくしても一旦は必ず反抗があるべきである。況や單純な惰性に基くものに非ずして、今尙民心の機微に、之を支持するに足るほどの信仰が存する時、些しも其由來と趨勢とを省察せずして、舶來粗製の批判を之に下さんとするは、如何にも無鐵砲な且危険な語である。」と云ふ通りである。

近頃祭禮に芝居類似の眞似をやれなどと云ふ論者がゐるのも厄介な事である。日本の祭はその村或は町の全體意識が最もよく

表はれてくる場合である。神輿といふ象徴を通じて日頃個人個人の自意識の中にかくれてゐたその團體の共同精神がゆり起され發揮されてくる。若衆が神輿を擔ぐのを止めて御白粉や紅をべた／＼なすりはつたり斬られたりする眞似をする様になれば日本の村々の神道又末である。祭禮の様なものに不當な壓迫を加ふるのも悪ければ、又所謂善導などはしない方がよい。由來政府の善導で成功したためしはないそうであるから。(以上三項松本信廣)

大正七年度古蹟調査報告 第一冊 (編輯總督府發行)

卷頭に濱田梅原兩氏の一慶尚北道慶尚南道古蹟調査報告書を掲載す。第一編は慶尚北道星州舊古蹟、第二編は同高靈郡古蹟、第三編は慶尚南道昌寧郡古蹟に就て各その發掘せし古蹟の外形、石室の構造、遺物の配置、遺物の精密なる記載をなし、第四編に古蹟及遺物の研究を試みてなる。星州郡古蹟への星山伽倻高靈郡は大伽倻國、昌寧郡は比自火の故地で何れも上代に於て我日本民族と縁故深き任那の土地である。土器は星州のもの薄手にして形狀簡素であり、昌寧のものは厚手にして技巧的であり、恐らく前者古く後者新しかるべく、後者が脆弱なる土器を多く採出するは葬儀漸次形式化し奢侈を競ひ、外觀を張るに専らになりし結果ならんと論じ、その土器の蓋は金屬器若しくは木製品を模造せしものなるべく、縱帯を施し之を釘着せる形あることを指摘し、又エトルスキ、エジプトの遺物と同じく三角形の透孔を穿てるは黨中に於て被倣するを防ぐ技術上の要求より出で東西軌を同じくした